2021年11月18日：令和3年環境・建設委員会

◯たきぐち委員　それでは、私からは、地元の尾久の原公園と隅田川に関わる事業について伺ってまいりたいと思います。

まず、都立尾久の原公園であります。

尾久の原公園は、旭電化の工場跡地に開設された公園でありまして、湿地だった場所がそのまま残っており、通称トンボ池や、約百七十本植樹されたシダレザクラなど、都民、そして区民に親しまれております。

先日、令和二年度の指定管理者管理運営状況評価結果が発表されましたが、尾久の原公園の評価について、まず伺いたいと思います。

◯植村公園緑地部長　尾久の原公園では、ボランティア団体と協働して、都心では希少な動植物の保護活動を継続的に行っております。

令和二年度は、このような保護活動を通じて、希少種のハンゲショウやチョウトンボなどの生息が確認できたことや、コロナ禍においても、個人でできる自然観察シートを作成し、子供たちに公園の自然環境や新たな楽しみ方を発信したことなどを評価しております。

◯たきぐち委員　ボランティア団体と協働して行う希少な動植物の保護活動が一定の成果を上げていることが評価されているということであります。

尾久の原公園の管理運営、整備などについては、尾久の原公園マネジメントプランで取組方針が定められていると承知しております。運営には複数の民間団体が携わっておりまして、このうち尾久の原愛好会は二〇一八年に、全国育樹祭で東京都の緑化等功労者に選出されたほか、今年八月には「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰を受賞するなど、自然環境の観察や保護活動などを積極的に実施されている団体です。

先日、団体の方とお話をする機会がありましたけれども、希少動植物の中でも、環境省の準絶滅危惧種であるミゾコウジュや絶滅危惧II類のタコノアシ、こういった植物が生えておりまして、毎年生育状況を確認しているということでありました。

指定管理者の方も日々の状況を観察するなど、協力的に対応いただいているというお話でありましたが、ただ、近年、様々な草木の茎が細くなっているんじゃないかと、土壌が弱っているんではないかと、そういった心配する声もありました。

もともと工場の跡地で、定期的に土壌、大気、水に対するダイオキシン調査を実施するなど特別な対応が求められており、そうした対策が、例えば盛土などの対策が水はけの状況に何か影響を及ぼしているんじゃないかとか、いろいろと推測はするんですけれども、なかなか原因を特定することは難しいようであります。

公園には多くの親子連れの姿もあり、自然環境を維持しながら、都民が安全・安心に、そして便利に利用できるよう、対策を講じていく必要があると思います。

そこで、尾久の原公園が、その特性を生かしながら、地域住民に親しまれる緑豊かな公園としてあり続けるために、今後どのように取り組んでいくのか、見解を伺います。

◯根来公園計画担当部長　尾久の原公園は、その一部がダイオキシン類土壌汚染対策地域に指定されておりまして、水質等の環境調査を行いながら、安全・安心な公園づくりを行っております。

施設改修におきましては、土地の改変や掘削に制約がある中、工法の工夫を図りながら、現在、希少なトンボ等を観察できるデッキの改修設計を進めております。また、園内に生息する希少な動植物を保護するため、指定管理者や自然保護団体と連携しながら、その生息環境の保全等に努めております。

今後とも、豊かな自然環境を保全し、都民に親しまれる公園づくりに取り組んでまいります。

◯たきぐち委員　制約がある中でデッキの改修設計を進めていただいているということでありますが、トンボが生息するには開放水面でなければいけないけれども、放置しておくとアシで覆われてしまうと。さらには、池には外来種であるライギョの存在が確認されておりまして、本来であれば駆除することが望ましいわけでありますけれども、池の構造上、かい掘り、つまり水を抜くことができず、ダイオキシンの存在が、そこに手を入れることへの障害となっているといった課題があるようであります。

今すぐにベストの解決策を見いだすことは非常に難しいという印象でありますけれども、現場で活動している団体や指定管理者とも、日々の変化、現状などについて情報共有しながら、尾久の原公園らしい自然の保全に向けて取組を進めていただきたいというふうに思います。

次に、この尾久の原公園も接しております隅田川の整備について伺ってまいりたいと思います。

東京都の東部を流れる隅田川は、荒川水系の一級河川で、流路延長二十三・五キロ、流域面積は、上流部の新河岸川を含んで六百九十・三平方キロメートルと、都が管理する最大の河川であります。

もともとは荒川の下流部に当たり、荒川、隅田川、浅草川など、複数の名前で呼ばれていたわけでありますが、明治末期の水害で甚大な被害が生じたことから、人工的に荒川放水路が約二十年かけて造られ、一九六四年の河川法改正を受けて、荒川放水路の方が荒川となって、従来の荒川、岩淵水門から東京湾に注ぎ込むまでの区間が隅田川と正式に呼ばれるようになった、そんな経緯があるわけであります。

産業や暮らしとの関わりにおいては、江戸時代は、上流の秩父から材木を運搬する水運の要として江戸城下を支える役割を果たし、私の地元荒川区の南千住には、今でも運送業が集積をしております。

また、両国や浅草などは、江戸の名所としてにぎわいを見せておりましたが、高度経済成長期に工場排水や生活排水によって水質が悪化し、隅田川に生き物は生息できないといわれまして、都民からも敬遠されるほど深刻な状況でもありました。

隅田川の水質については、私も公営企業委員会などで何度か取り上げておりますが、下水道の整備や三河島水再生センターなどにおける取組などによって、大きく改善されているところであります。

こうした中で、都は、災害への備えを進め、都民の安全を守るとともに、水辺空間を生かした魅力ある河川とするべく、これまで取組を進めてきたと承知をしております。

現在も堤防の築堤工事や耐震工事など様々な工事が実施されておりますが、それぞれがどのような計画に基づいて実施されているのか伺います。

◯齊藤河川部長　隅田川における耐震対策は、東日本大震災を受け、想定する最大級の地震が発生した場合におきましても、施設の機能を保持し、津波等による浸水を防止するため、平成二十四年に策定した東部低地帯の河川施設整備計画により、その事業規模や期間を決めております。

こうした耐震対策の取組に加えまして、スーパー堤防整備やテラス整備など必要な対策を、河川法に基づく隅田川流域河川整備計画に位置づけ、事業を進めております。

◯たきぐち委員　東日本大震災発災後、防災施策において、想定外を想定内としなければいけないといった論調が広がり、東京湾を震源とする首都直下型の地震が起きた際に、津波が隅田川などの河川でどこまで遡上するのかということにも関心が集まったと記憶しております。

結果的に大規模な津波の遡上リスクは低く、堤防高については、従来の高潮対策をベースとしながら、今ご答弁がありましたけれども、耐震対策の強化などを盛り込んだ東部低地帯の河川施設整備計画及び隅田川流域河川整備計画を策定して工事を推進していると理解をいたしました。

一方、地球規模での気候変動に伴う近年の大型台風や、想定を超えるような集中豪雨が頻発化しているわけであります。特に、積乱雲が次々と発生して同じ場所に停滞する線状降水帯は、全国各地で甚大な被害をもたらし

ているところでありまして、従来の常識とは異なる、気象災害ともいえる状況が今後起こり得るということも踏まえて、対応を進めていただきたいと思います。
　さて、私の地元荒川区内の隅田川では、都の再開発事業として、約四十年かけて完成した白鬚西地区におけるスーパー堤防の整備や東日本大震災後の耐震対策など、精力的に工事を進めていただいていると認識をしております。
　そこでまず、荒川区を流れる河川における防潮堤の耐震工事の取組状況を伺います。

◯齊藤河川部長　都は、計画に基づきまして、荒川区を流れる隅田川の堤防約二十七キロメートルの耐震対策を実施しております。これまでに約九割で事業化しており、令和三年度は、荒川区内の千住大橋上流右岸などの約〇・一キロメートルにおきまして、新たに工事を実施いたします。

◯たきぐち委員　計画に沿って耐震工事が進められているということであります。
　次に、荒川区内におけるスーパー堤防の取組状況についても伺いたいと思います。

◯齊藤河川部長　荒川区内のスーパー堤防は、西尾久三丁目地区などで区立中学校や公園等と一体的に整備を行い、これまでに七地区が完成しており、堤防延長の約五割がスーパー堤防となっております。
　さらに、西尾久六丁目地区では、区立あらかわ遊園の拡張エリアにおいて盛土工事を実施しており、令和四年度には被覆修景工事を完了する予定でございます。

◯たきぐち委員　今年四月に一部オープンした宮前公園など、西尾久エリアで着実にスーパー堤防化が図られていることは、現地で私も何度も確認をしているところであります。
　また、都内唯一の区立遊園地であるあらかわ遊園のリニューアルに合わせて整備が進められている西尾久六丁目の工事は、来年度中に完了するということでありました。加えて、隅田川沿いの町屋七丁目においても、町屋公園として整備を進めていくべく、今年、都市計画決定がなされました。
　さらに、先日の公営企業決算委員会で質疑を行いましたが、昨年、水道局が旧南千住浄水場用地を荒川区に売却しました。区は、当該地についても都市計画公園として整備すると同時に、大規模災害が発生した際の活用を図る方針を示しております。
　こうした計画されている両公園についても、隅田川と一体化した事業を進めるべきと考えますが、区の公園整備と併せて、今後スーパー堤防の整備にどのように取り組んでいくのか伺います。

◯齊藤河川部長　隅田川などにおいて、地震に対する安全性と河川環境の向上を図るためには、沿川の公園整備と一体的にスーパー堤防を事業化していくことが重要でございまして、荒川区の動きを注視しつつ、スーパー堤防の整備を区と連携して推進してまいります。

◯たきぐち委員　荒川区は、区民一人当たりの公園面積が約二平方メートルと低い水準にあることから、都市計画公園の整備が進められているところであります。
　都市計画決定された町屋公園をどのような公園にしていくのかということは、区議会でも様々な議論がなされているようでありまして、旧南千住浄水場用地に関しても、現時点でクリアすべき課題もあると承知をしておりますが、ご答弁いただきましたとおり、今後具体の計画策定を注視しながら、荒川区と連携を図り、しっかりと進めていただきたいと要望しておきたいと思います。
　一昨年の台風十九号、令和元年東日本台風では、十二年ぶりに岩淵水門が閉鎖され、荒川の観測所の水位は付近の隅田川の堤防高六・九メートルを上回る七・一七メートルに達しました。近年の激甚化、頻発化する風水害

から都民の生命と財産を守るためには、ハード対策だけでは限界があり、様々なソフト対策も重要であります。
　そこで、平成二十七年の水防法の改正を踏まえ、今年三月に隅田川及び新河岸川流域の浸水予想区域図が改定されました。これを受けて、建設局としてどのような対応を図っていくのか伺います。

◯齊藤河川部長　本年三月の浸水予想区域図の改定を受けまして、スマートフォンなどから浸水の深さや継続時間についてピンポイントに確認できる浸水リスク検索サービスの拡充を進めております。
　また、この図を基に区が作成する洪水ハザードマップの改定を支援してまいります。

◯たきぐち委員　住民の迅速な避難行動を促すためには、住民の防災意識を高めるハザードマップの作成が重要であります。改定された浸水予想区域図に基づく各区のハザードマップの改定を支援していただきたいと思います。
　加えて、災害時の正確な情報発信が重要であることはいうまでもありません。情報発信力を強化するためには、デジタル技術の活用が不可欠であります。
　都は、未来の東京戦略において、河川監視カメラを二〇三〇年度までに二百か所程度まで増設するとしておりますが、新河岸川及び隅田川について、台風や豪雨時における迅速な避難行動を促すための監視カメラの設置など、情報発信を強化すべきと考えますが、見解を伺います。

◯齊藤河川部長　都は、住民の迅速な避難につながる情報発信の充実に向け、河川の水位などを提供する水防災総合情報システムについて、継続的に改善しております。
　例えば、一昨年、スマートフォンへの対応による操作性の向上に併せまして、ホームページの多言語化を実施いたしますとともに、令和元年東日本台風以降は、当時のアクセス数の二倍以上に耐えることができるよう、通信回線やサーバーを増強し、必要な情報を誰もが確実に入手できるようにいたしました。
　また、河川監視カメラについては、新河岸川で今年六月に三か所増設するとともに、今後、隅田川においても設置を検討してまいります。

◯たきぐち委員　災害時に情報発信サイトへのアクセスが集中してつながらないといった事態を回避するために、各自治体ではサーバー容量の増強に努めているところであります。
　都も、ホームページの多言語化に加えて、通信回線やサーバーの増強を図っているということでありますので、確実に情報を提供できる体制を確保していただきたいと思います。
　また、シン・トセイ戦略では、情報発信が建設局のリーディングプロジェクトとして選定されており、ご答弁があったとおり、水防災総合情報システムの改善に取り組まれていると同時に、今年六月からはユーチューブを活用して、動画をリアルタイムで提供していく体制を整えたと承知しております。
　新河岸川で監視カメラを三か所増設し、隅田川での設置も検討していくというご答弁でありましたが、隅田川は岩淵水門が閉じられることで基本的には氾濫から免れるとされているんですが、近年の異常気象を見ますと、絶対に氾濫しないと断定できるかというと、いろんな関係者に聞いても、なかなか断定できないと、非常に不安があるというような状況でもあります。
　国交省が想定する荒川の堤防決壊、あるいは新河岸川の氾濫など、起こり得るあらゆる事態を想定して、どの場所に監視カメラを設置することが有効であるのかということを十分検討されながら、防災ＤＸを推進して、都民の生命と財産を守るための施策を前に進めていただきたいということを強く求めておきたいと思います。
　災害から隅田川沿川の住民を守る、ハード対策とソフト対策について確認をさせていただきました。
　一方、隅田川は、都民に貴重なオープンスペースを提供している都市施設でもあります。この隅田川を、人々が集い、散策や回遊ができるよう、さらに魅力的な空間にしていくためには、テラスの修景工事や連続化工事が

重要であります。
　そこで、隅田川におけるテラスの修景工事や連続化工事の取組状況と、今後どのように整備していくのか伺います。

◯齊藤河川部長　隅田川では、テラスの修景整備やテラスを連続化する橋梁の整備を進めております。テラスの修景につきましては、計画延長約四十八キロメートルのうち約七割が完成しており、令和三年度は、荒川区内のＪＲ常磐線付近など約七百メートルにおきまして、新たに工事を実施いたします。
　また、テラスを連続化する橋梁につきましては、これまで月島川の合流部で完成し、現在、大横川や竪川の合流部において工事を実施しております。
　今後とも、テラスの修景整備等を積極的に進め、魅力的な水辺空間を創出してまいります。

◯たきぐち委員　今年度整備する約七百メートルの工事は、先ほどご答弁がありました千住大橋上流右岸の耐震工事と橋を隔てた、千住大橋下流右岸のエリアと認識をしております。このエリアが整備されることで、将来的に旧南千住浄水場跡地の公園沿いと連続化されることも期待をされるところであります。
　テラスが修景された連続した区間では、多くの人々が水辺を楽しむ姿、散策する姿が見受けられます。先週の日曜日、言問橋から厩橋まで改めて様子を見て回りましたけれども、浅草周辺は、コロナ前の状況とはいかないまでも、多くの観光客と見られる方々で非常ににぎわっておりました。
　この周辺は私の選挙区外でありますので、深く言及することはいたしませんが、テラスが連続したことによって、どのように活用されるようになったのか、その事例について伺いたいと思います。

◯齊藤河川部長　例えば、白鬚橋から千住汐入大橋間は荒川区のウオーキングルートとして設定され、多くの方々が散策しております。
　また、両国橋から駒形橋間は墨田区のランニングコースとして設定され、地元の小学校のマラソン大会にも利用されております。

◯たきぐち委員　連続化によって、観光地としてのにぎわいだけではなくて、地域住民のウオーキングルートやランニングコースとしての活用がなされているということでありました。
　答弁いただきました白鬚橋から千住汐入大橋間においては、毎年、地域団体の主催による駅伝大会も開催しておりまして、小学生、中学生のチームから大人のチームまで参加できる大会として、昨年は中止になりましたけれども、私も毎年出場させていただいております。
　墨田区では、先ほど加藤理事からもテラスについての言及がありましたが、小学校のマラソン大会に利用されているということであります。子供たちがこうした水辺の自然を感じながらスポーツができる環境というのは、私はすごく貴重だというふうに思っております。
　私は幼少時代、静岡で暮らした経験がありますので、山、川、海に囲まれて育つ地方と異なって、都心においてはなかなか日常の中で自然を感じる機会が少ないのを感じております。テラスとして整備されているとはいえ、上流から流れてくる河川の水から発せられる自然のエネルギーというのか、息吹というのか、こういったものを感じることは、私は子供たちにとっての貴重な原体験として残っていくものと考えております。引き続き、こうした環境がつくられるよう、連続化に向けた取組を進めていただきたいというふうに思います。
　テラスの連続化などとともに、夜間景観を創出し、隅田川の魅力をさらに高めていく必要があると思います。東京二〇二〇大会に向けて、建設局では令和二年八月までに、昨年の八月までに、隅田川に架かる橋について、カラー演出が可能なライトアップを整備したと認識をしています。これらのライトアップの実施状況と今後の展開について伺います。

○村上道路保全担当部長　建設局では、水辺のにぎわい向上や新たな観光資源としての活用を図る観点から、白鬚橋、永代橋など十橋でカラー演出が可能なライトアップの施設を整備しました。

これら十橋は、アーチ橋やつり橋など、橋そのものの形や色の美しさを生かした照明デザインとし、省エネルギー化に配慮してＬＥＤ器具を採用しました。

この施設を生かしまして、都庁における横断的な取組として、医療関係者等応援ライトアップでは欄干等をブルーに、またオリンピック・パラリンピック期間中にはアスリートへの応援を目的に、五色等に照らすカラー演出を実施してきました。

今後も引き続き、週末や祝日には、橋梁ごとに設定した季節の色とするカラー演出を実施するなど、隅田川の魅力向上に向けた橋梁のライトアップに取り組んでまいります。

○たきぐち委員　コロナ禍における医療従事者にエールを送るブルーライトアップは印象的でありましたが、新型コロナの感染拡大と二〇二〇大会の延期を受けて、当初の計画から大幅に変更になる中で対応を図られてこられたんだと推察をいたします。

ライトアップにつきましては、以前、私も一般質問で取り上げましたけれども、都は平成三十年に公共施設等のライトアップ基本方針を策定し、隅田川、臨海部エリアについても重点的かつ一体的に進める施設として位置づけられております。

光を点から線、面へ、そして公共施設から民間施設へと波及させていくためには、政策企画局を中心に、戦略的かつ局横断的に取り組むべき課題と考えておりますが、建設局としても、隅田川のさらなる魅力向上に向けて継続的に取り組んでいただきたいと思います。

一方で、隅田川には、関東大震災の復興時に架設された歴史的な橋梁や、尾久橋通りや明治通りなど幹線道路に架かる橋梁が多くあります。これらの橋梁の老朽化対策を進め、次世代へ継承していくことが重要であり、都は、橋梁の長寿命化事業を進めています。

そこで、隅田川に架かる橋梁のうち、荒川区内の長寿命化事業の進捗状況について確認をしておきます。

○村上道路保全担当部長　長寿命化事業は、将来の劣化状況を予測した上で、新たな工法や材料を活用することなどにより適切な対策を実施することで、対策後、百年以上の耐久性や安全性などを確保するものであります。

都が管理する隅田川に架かる二十橋のうち、長寿命化事業の対象は十二橋であり、令和二年度までに十一橋で着手し、このうち八橋で完了しました。

荒川区内では、白鬚橋と尾久橋の二橋を対象にしており、このうち白鬚橋は平成二十八年度に事業を完了しました。

また、尾久橋は令和元年度に事業着手し、現在事業中でございます。

○たきぐち委員　先月の地震で、水道橋の一部が崩落するニュースが注目されましたが、公共インフラに対する老朽化対策への都民の関心は高くなっていると感じております。今後も持続可能な橋梁の維持管理を実現し、都民の安全・安心を確保するとともに、次世代に良好な状態で継承していけるよう取り組んでいただきたいと思います。

以上、隅田川に関わる施策について、るる伺ってまいりましたが、最後に、隅田川の沿川区民が安心・安全に、そして快適に暮らせる水辺環境の整備と同時に、多くの来街者が集う魅力的な水辺空間の創出に向けた局長の思い、決意を伺いたいと思います。

○中島建設局長　先ほど委員から隅田川の歴史についてのお話もいただきましたけれども、隅田川は、かつて水

の都と呼ばれた江戸東京の歴史の中で、河岸や見せ物小屋などが集積し、舟運や遊興等の都市機能の中心であり、庶民のにぎわいであふれた空間でございました。現在においても、東京を代表し、都市の魅力を高める上で重要な河川であると認識しております。

建設局は、隅田川におきまして、スーパー堤防やテラス整備の推進によりまして、水辺に親しむ環境の向上を図っております。さらに、テラスの連続化や照明の設置、橋梁のライトアップ等により、歩行者の安全性や利便性、回遊性の向上、新たな観光資源の創出にも取り組んでおります。

耐震性の向上など、災害対策に万全を期した上で、人々が集い、親しめる、魅力的な東京の顔となる水辺空間を創出し、にぎわいや潤いのある都市東京を実現してまいります。

◯たきぐち委員　ご答弁ありがとうございました。今、中島局長からもお話しいただいたとおり、隅田川は、都が管理する東京を代表する河川でありまして、これまでの歴史の中で、文化芸術をはじめ様々なにぎわいを創出してきました。

コロナ禍でインバウンドが激減し、人流が抑制され、様相は大きく変化したわけでありますけれども、ポストコロナにおいても、東京の顔としての魅力づくりは重要な施策であると考えております。

あわせて、気候変動に伴う自然災害の脅威がますます高まっており、地域住民の生命と財産を守るべく、局一丸となって、ハード、ソフト両面からの対策を講じていただくよう強く要望いたしまして、質疑を終わります。